様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５００８９７

研究課題名（和文）在宅療養・介護における高齢者のＱＯＬを支える在宅ケアモデルの構築に関する研究

研究課題名（英文）Study on the construction of the home health care model to support the elderly of QOL in long-term care at home

研究代表者
沖中　由美（OKINAKA, Yumi）

岡山大学・保健学研究科・准教授

研究者番号：５０３１０８９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，高齢者のQOLを支える在宅ケアモデルの構築に向けて，独居高齢者の健康状態と老いの生き方，生活体験に関する面接調査を実施し，その分析結果に基づいて質問紙調査票を作成し実施した。中国・四国地方に在住の独居高齢者1058名に調査票を配布し，735名から有効回答を得た。独居高齢者の半数以上が生きる希望をもち，生きる希望は人生満足感，生活満足感，社会的役割と関連していることが示された。

研究成果の概要（英文）：In this study, for the construction of the home care model to support the QOL of elderly people, way of life of health and old age of the elderly living alone, we conducted the interviews about the life experience, a questionnaire survey on the basis of the analysis result create, were performed. To distribute the questionnaire to the elderly living alone 1058 people living in Chugoku and Shikoku area in Japan, were obtained valid responses from 735 people. The Elderly living alone has a hope that more than half. In addition, it has been shown that hope is associated with live and life satisfaction and the social role satisfaction.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：在宅ケア　高齢者　QOL　在宅療養　在宅介護　老い　独居　夫婦

１．研究開始当初の背景

わが国では急速に高齢化が進展し，在宅での医療技術が進歩している。病気や障がいをもちながら在宅で療養する人が増加するなかで，在宅での療養や介護の場面では，身体的，精神的，経済的負担が大きくなる高齢の夫婦や親子間での老老介護が社会的な課題として挙げられている。また，高齢者が自らの病気に向き合い，その一方で配偶者や親の介護を担いながら，自らの老いをどのように生きるのかが生涯発達的な課題である。そこで，今後ますます増加することが推測される高齢者の在宅療養や介護において，老いを生きる高齢者の在宅療養・介護を支援するための介入方法を検討することは火急に解決すべき社会的課題のひとつである。

２．研究の目的

本研究は，要支援・要介護状態にある高齢者夫婦および独居高齢者の QOL を支える老いの生き方や信念の統合モデルを検証し，医療従事者のケア介入方法を検討したうえで在宅ケアモデルを構築することを目的とする。

３．研究の方法

１）要支援・要介護状態にある独居高齢者に対する生活体験を明らかにするために面接調査を実施する。
２）在宅療養・介護継続に伴う高齢者夫婦の QOL の変化を明らかにするために，高齢者夫婦の生き方や信念の統合モデルに基づく QOL 調査の追跡調査を実施する。
３）要支援・要介護状態にある独居高齢者の生活体験の分析および先行の高齢者夫婦の生き方や信念の統合モデルを基に質問紙調査票を作成する。
４）要支援・要介護状態にある独居高齢者に対して質問紙調査を実施する。
５）要支援・要介護状態にある高齢者夫婦および独居高齢者の調査を基に，在宅療養・介護における高齢者の QOL を支持する生き方や信念の統合ケアモデルを構築し，医療従事者のケア介入方法を検討する。

４．研究成果

１）在宅介護における高齢者夫婦の健康状態と老いの生き方に関する経年変化

共に 65 歳以上の同居夫婦 88 組を対象に，高齢者夫婦の生き方や信念の統合モデルに基づき，第 1 回調査（平成 23 年 2，3 月）からの経年変化を分析した。第 2 回調査は平成 24 年 8 月であった。

夫婦ペアの有効回答数は 36 組（有効回答率 40.9%）で，妻介護者夫婦 23 組，夫介護者夫婦 13 組であった。年齢は，妻介護者 79.0±5.8 歳および夫療養者 81.8±6.5 歳，夫介護者 82.2±6.6 歳，妻療養者 77.3±5.6 歳であった。主な結果として，健康状態（SF36-v2）は，「身体機能」「日常役割機能（身体）」「活力」「日常役割機能（精神）」が有意に低下し，抑うつ傾向（GDS15）は有意に高くなっていた。一方，療養者は，［老いの生き方］として，「配偶者の健康や生活を気にかけている」「年をとることはまんざら悪いことではない」「身近に同世代との付き合いがある」が有意に低下していたが，［健康状態］に変化はみられなかった。

２）ひとりで暮らす要支援・要介護高齢者の老いの生き方

⑴　面接調査

要支援・要介護状態にある独居高齢者がどのように老いを生きているのかを記述することを目的として面接調査を実施した。

分析の結果，要支援・要介護状態にある独居高齢者は，老いてひとりで暮らす自由と孤独のなかで日常的な緊張と不安をいだき，今そしてこれからの生活について，病気や加齢変化により低下する自らの心身機能に応じて，自分に合った移動手段が確保できれば広がる世界ととらえていた。そして，老いの自覚とともに，ひとり暮らしをする前にいだいていた理想と現実との暮らしぶりの違いのなかで生きている高齢者は，これまでの人生において培われてきた自らの老いを生きぬく力があることが見出された。

⑵　質問紙調査

中国・四国地方の居宅介護支援事業所と地域包括支援センターの協力を得て，65 歳以上の独居高齢者 735 名に，健康と生活，老いの生き方に関する質問紙調査を実施した。質問紙調査票は，面接調査と高齢者の健康と生活に関する先行調査の結果を吟味して作成した。

①　対象者の概要

女性は 590 名（80.3%），男性は 145 名（19.7%），平均年齢は 83.2 歳（65～103 歳）で，男性は 81.9 歳（65～99 歳），女性は 83.6（65～103 歳）だった。

②　健康状態

調査対象者のうち「要介護 1」が 28.6%で最も多く，病気の種類では，高血圧，関節や骨の病気の順で多かった。

受けている医療処置が特にない人は約 6 割であった。

サービスの利用状況では，通所型サービスを約 6 割の人が利用し，半数以上が訪問介護

を利用していた。

③　生活の状況

「ここ1か月間,仕事や農作業をしている」は,「毎日する」が10.8%,「週に2～3回程度」が14.2%,「まったくしない」が67.4%だった。

「クラブや婦人会，習い事，ボランティアなど社会活動に参加している」は,「まったくしない」が74.6%と最も多かった。

「知人や友人，近隣に，ちょっとした用事や留守番を頼める人がいる」は全体で55.6%と，半数を超えていた。

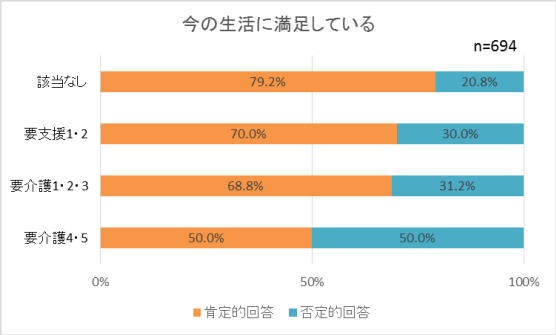
④　老いの生き方

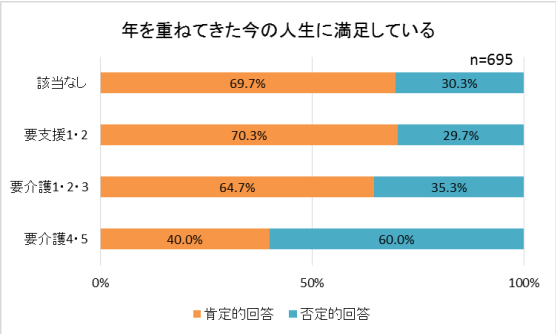
老いの意識や生き方について肯定的な回答が多かったのは,「今の生活に満足している」が全体の 66.8%,「年を重ねてきた今の自分の人生に満足している」が全体の64.1%,「生きる希望がある」が全体の56.2%などであった。また，全体の48.4%が「年をとることはまんざら悪いことではない」と老いを肯定的に意識していた。一方，否定的な回答が多かったのは,「友人や近所，社会活動のなかに私の役割がある」が全体の 66.8%,「家族のなかに家事手伝いや孫の世話など私の役割がある」が全体の66.5%などであり，要介護度によって役割の認識に違いが認められた。

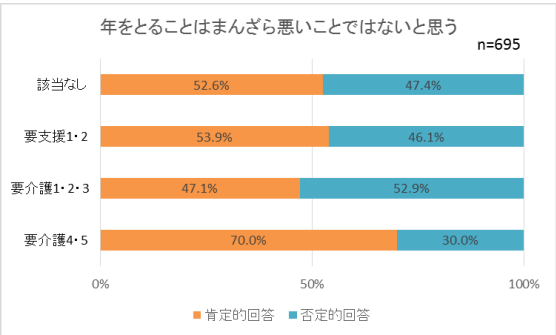
年代別にみると,「年をとるにつれ何事も諦めるようになった」は「85歳以上」に肯定的回答が多く,「今までの自分の人生経験を子どもや孫の世代に伝えている」は「75歳以上85歳未満」が多かった。「家族のなかに家事手伝いや孫の世話など役割がある」「友人や近所，社会活動のなかに私の役割がある」は「85歳以上」に否定的回答が多く,「年を重ねてきた今の人生に満足している」は肯定的回答が多かった。また,「生きる希望がある」は，各年代とも半数以上が肯定的回答であり,「65歳以上75歳未満」が63.2%,「75歳以上85歳未満」が57.7%,「85歳以上」が53.1%と，年齢が上がるほど肯定的回答は減少していた。

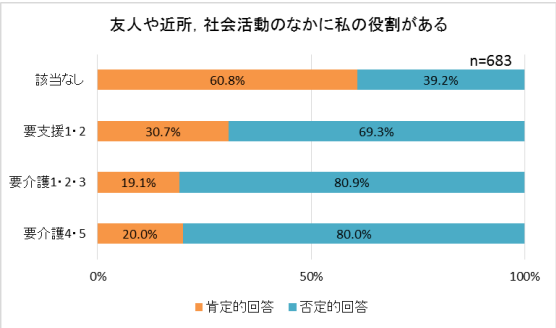
要介護度別にみると,「家族のなかに私の役割がある」「友人や近所，社会活動のなかに私の役割がある」は，該当なしを含むすべての要介護度において半数以上が否定的回答であったが,「要介護1・2・3」は否定的回答が多かった。また,「今までの人生経験を子どもや孫の世代に伝えている」は,「要介護1・2・3」で否定的回答が6割を超えていた。

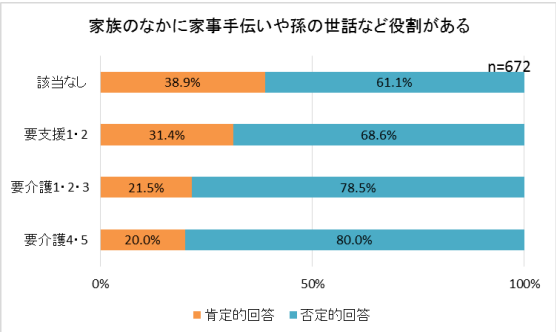
「年を重ねてきた自分の人生に満足している」は,「要介護4・5」で肯定的回答が4割であったが,それ以外は6割を超えており,要介護度による違いは認められなかった。











⑤　独居高齢者の希望，老いの意識と老いの生き方，生活満足感，社会的役割，孤立，抑うつ状態との関連

「生きる希望がある」と有意な関連がみられた項目は，「年を重ねてきた今の人生に満足している」こと，「今の生活に満足している」こと，健康状態として「抑うつ傾向がない」こと，「友人や近所，社会活動のなかに私の役割がある」こと，老いの意識と老いの生き方「年をとることはまんざら悪いことではないと思う」，「生きる目的がある」であった。

3）独居高齢者の健康と生活，老いの生き方に関するケアへの示唆

面接調査の結果から，独居高齢者は，居住地域の特性や性別によって生活のありようや老いの生き方は異なる様相を呈していた。しかし，要支援・要介護状態にある独居高齢者は，さみしさや孤独感，緊急時対応の危機感を背景に，異世代交流を通して社会的役割をもつことにより，老いを生きぬく力を高め，健康のために自分にできることを試し続けていることが示唆された。また，自分なりの方法で健康を管理しながらコミュニティとのつながりが途絶えないよう他者と交流しており，ケア提供者は，健康のためにできることを試し続ける独居高齢者の人生において培われてきた価値観や信念を支持したうえで，セルフケアが可能な具体的な健康管理方法を提案していく必要があると考えられた。

面接調査の結果に基づき実施した質問紙調査では，過半数が要支援状態あるいは該当せず，約 8 割が 75 歳以上の後期高齢者であった。独居高齢者の老いの生き方は，要介護状態や年代により異なる様相をみせながらも，家族あるいはコミュニティのなかに自分の役割があること，人生満足感が高いこと，人生経験を伝承していることなどが生きる希望と関連していることが示された。独居高齢者がたとえ要介護状態になったとしても，人生経験を次世代に語り伝えることができる環境を整え，世代間交流を通して今の自分に社会的な役割があることを認識し，これまでの人生を肯定的に意味づけられるよう，人と人をつなぐかかわりが身近なコミュニティで展開できるしくみづくりが独居高齢者の QOL を支持するうえで重要であることが示唆された。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① 沖中　由美，西田　真寿美：在宅介護における高齢者夫婦の「生きる希望」に関連する要因　－妻が夫を介護する夫婦と夫が妻を介護する夫婦における分析－，日本看護研究学会雑誌，査読有，37（4），45-56，2014.

② 沖中　由美，西田　真寿美：在宅介護における高齢者夫婦のかかわり合いからみた老いの生き方，日本老年看護学会誌，査読有，18（2），115-122，2014.

③ 沖中　由美，西田真寿美：配偶者を在宅で介護する高齢者の老いを生きる体験，島根大学医学部紀要，査読有，37，1-8，2014.

〔学会発表〕（計　9　件）

① 沖中　由美：独居高齢者の希望に関連する要因の検討，第 35 回日本看護科学学会学術集会，広島国際会議場，広島市，2015.12.5-6.

② 沖中　由美：農村部のひとり暮らし高齢者の老いの生き方と年代との関連，日本老年看護学会第 20 回学術集会，パシフィコ横浜，横浜市，2015.6.12-14.

③ 沖中　由美：農村部で老いを生きるひとり暮らし要支援女性高齢者の体験，第 34 回日本看護科学学会学術集会，名古屋国際会議場，名古屋市，2014.11.29-30.

④ 沖中　由美：都市部で介護保険サービスを利用している独居女性高齢者の老いの生き方，日本老年看護学会第 19 回学術集会，愛知県名古屋市，2014.6.28-29.

⑤ 沖中　由美：在宅介護における高齢夫婦間の老いの生き方と健康関連 QOL の経年変化，第 33 回日本看護科学学会学術集会，大阪市，2013.12.6-7.

⑥ Yumi Okinaka, Masumi Nishida: Health-related QOL among elderly married couples caring for a spouse at home, 3rd World Academy of Nursing Science, The-K Seoul Hotel, Seoul Korea, October 18, 2013.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

6．研究組織

(1)研究代表者

沖中　由美（OKINAKA,Yumi）

岡山大学大学院保健学研究科・准教授

研究者番号：50310892

(2)研究分担者　なし